

2017 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

加納 千恵子 (筑波大学・名誉教授)

この度は、思いがけなく学会賞という大きな賞をいただくことになり、大変光栄に思いますとともに、正直なところ、私がいただいてよいのかという戸惑いもありました。私個人として、学会賞の選考基準にあるようなめざましい業績があったというわけでもなく、また今年の3月に長年勤めた大学を定年退職し、今後の活躍が期待されるという年齢でもないと思われたのがその理由です。

ただ、今回の受賞理由を読ませていただき、今まで多くの仲間たちとともに日本語教育の現場でずっと続けてきた教材開発や教育方法の研究、教師養成などの活動など、いわばチームプレーを評価していただけたことが大変嬉しく、またありがたく思われましたので、仲間たちとその喜びを分かちたいという気持ちで賞をお受けすることにいたしました。本当にありがとうございました。

日本語教育を長年続けてきて、この仕事は1人でできることではないとつくづく思うようになりました。この歳まで一緒に楽しく仕事ができる人間関係を得られたこと、また教育工学や社会学、心理学など他分野の先生方からも教えていただきながら教育研究に打ち込める環境を与えられたことに心から感謝しています。これは勤務校であった筑波大学ばかりではなく、本学会をはじめ、多くの研究会などで出会い様々な刺激を与えてくださった皆様、また縁あって共に学ぶことができた学生たちがいたからこそだと思っています。

日本が留学生の受入れに力を入れはじめ、留学生教育を全国展開して来た時代に、この分野で仕事できたことを幸せに思うとともに、無我夢中でしてきたことが少しでも世の中のお役に立ったのだろうかという反省もあります。時代の変化とともに、日本社会、そしてグローバルな社会において、日本語教育の果たす役割はますます大きくなってきていると感じます。しかしながら、これからの日本語教育や関連領域の教育研究に関わろうとしている若い世代の方々にとって、置かれている状況、与えられている条件は決して楽観視できることばかりではないと思います。今後のことにつきましては、私の恩師のお一人である大坪一夫先生がかつて私たちに「年をとったら、いつまでも自分が前に出て何かをするのではなく、若い人たちが自由に思い切って力を出せるようなサポートをするのが年寄りの役目なんだ」とおっしゃっていたことを胸に刻み、私も微力ながら、そのような形での貢献が少しでもできればと思っています。

今後ともよろしく願いいたします。



2017 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

岩田一成（聖心女子大学・准教授）

森篤嗣氏が2015年に奨励賞を受賞した際、「この賞は以後30代の人が取れるようにすべきだ！」などと演説をしていました。当時私は「ええこと言うな～」と思いつつ、自分が40才だったのでこの賞の対象者からは外れたなど漠然と思っていました（注意：いつか賞がもらえると思っていたわけではないですよ）。なので、この賞をいただいたときは驚きました。よくよく考えると森氏に受賞規定を勝手にいじる資格などはなかったんですけどね。

日本語の先生になってからちょうど20年が過ぎ、振り返ると私は周りの人に恵まれてきました。全くかなわないと思う先輩方、早めに仲良くしておかないとやばい！と願う優秀な後輩たち、いろいろな人から刺激を受けてきました。その刺激を少しずつ咀嚼して消化しながら時間をかけて自分を形成してきた気がします。この環境には、ただただ、感謝しかありません。

授賞理由に、くろしお出版の『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか—』を挙げていただいたのですが、日本語文法の記述はすでに成熟期に入っていると思います。ですから私はできるだけ教育につながる応用研究につとめようと、自治体などの公的文書、看護師国家試験、日常会話のおしゃべりなどの分析を行ってきました。今後も、教育実践現場の方が少しでも参考になるようなデータを提示できたらうれしいです。

地域日本語教育での活動も受賞理由の一つでしたが、これは大学院生の時から関わっている活動なので大変光栄です。文法中心の抽象的な教室活動から具体的な生活密着型の活動へ転換できるよう、『にほんごこれだけ1・2』（ココ出版）、『日本で生活する外国人のためのいろいろな書類の書き方』（アスク出版）を作成し普及に努めています。伝えたい発想は教材とともに広がると信じて、今後もニーズがある限りいろいろな現場に出向いていきたいと思っています。

また、マジョリティ教育の一環として「やさしい日本語」普及活動にも関わってきました。特に自治体のお知らせ・公共サインは少しでも読みやすく効果的に変わるべきだと思っています。大修館書店の『読み手に伝わる公用文：〈やさしい日本語〉の視点から』、『街の公共サインを点検する—外国人にはどう見えるか—』がきっかけとなり、いろいろな自治体の職員さんと仕事をさせていただいております。志を同じくする方はどこにでもいて、大変心強いです。1ミリでも社会が動くとするなら、そこに大きなエネルギーを割いて働きかける価値はあると思っています。

将来の大きなビジョンは特になく、1メートル先くらいの課題に取り組むことで精一杯です。自分は才能に恵まれた剛速球投手でないことがよくわかっているのですが、コーナーを丁寧についた技巧派ピッチングもできません。目指すのは、打たれても打たれてもクセ球を投げ続けるナックルボーラー型の研究者です。理想は元広島カープのフェルナンデスです。大好きなんです。



2017 年度日本語教育学会奨励賞 受賞コメント

三代純平（武蔵野美術大学・准教授）

この度は、日本語教育学会奨励賞をいただきましたこと、光栄に存じます。今回の受賞理由を拝読し、私のこれまでの研究と実践を丁寧に評価していただいたこと、心より感謝申し上げます。どの取り組みも私一人では成し得なかったものばかりで、その度に多くの方と協働しながらなんとか今までやっていくことができました。今回の受賞を機に、お世話になった方々との思い出をひとつひとつ振り返ることができたことは、私にとっては大変幸せなことでした。

2000年に、後の指導教官となる細川英雄先生の授業に参加したことから私と日本語教育の関係は始まります。留学生と共に、「魅力的な人」にインタビューをするという日本事情の授業は、講義型の授業に慣れていた私にとっては新鮮でした。留学生と深く対話した経験や一人の人間にじっくりと話を聞くという経験は、その後の実践研究やライフストーリー研究の原風景となっています。

私の実践研究は、どうすれば教室を対話の場とできるのか、そして、その対話がどのような社会をデザインしていくのかという問題意識に支えられています。近年は、教室と社会を結び、社会の中の教室の意義を、対話の場という観点から再構築することをめざしています。対話の力を個々の中に育むだけでなく、社会自体が対話の力を持つべきだと思うからです。私たちは対話を通じてお互いにその多様性を受け入れながら、新しい意味を作り出していかなければいけません。日本語教育という場はそのような機能を社会に対して担っていけると考えています。

実践を理解するためには、学習者を理解する必要があるという問題意識から、実践研究と並行する形でライフストーリー研究を続けてきました。ライフストーリーは、言語学習と学習者のアイデンティティが密接に関わっていることを私に教えてくれました。そして、アイデンティティと学習者の関係は、キャリアと言語学習の関係へと繋がっていきます。そこで、近年は元留学生のライフストーリー研究に力を入れています。また最近では、共同研究として日本語教師のライフストーリー研究にも携わるようになりました。日本語教育という世界を支えてきた諸先輩方の語りからは、いつも勇気をもらいます。この声をどのように語り継げばよいのだろうか、どうすれば彼らの魂を今後の日本語教育に息づかせていけるのだろうかというのが最近の私の大きな関心事です。

今後も多くの声を聞きながら、その声を実践に還元しつつ、ひとつひとつ研究と実践を積み重ねていこうと思います。そして、そのひとつひとつの研究と実践を多くの素晴らしい同僚たちや学生たちと共有していきたいと願っています。



2017 年度日本語教育学会論文賞 受賞コメント

坪田珠里（京都外国語大学大学院）

この度は、2017 年度『日本語教育』論文賞を賜り、大変光栄に存じます。学会事務局から長形の茶封筒が郵送されてきた時、「年度が変わるから学会費納入の通知だろう」などと思い、勢いよく封を破いたのですが、それが受賞のお知らせであり、その時は一瞬事態が飲み込めず、気が動転したことを覚えています。真っ先に知らせたのは離れて暮らす母でした。これまで進学や就職を含め、人生の選択の機において両親から意見されることは全くと言っていいほどありませんでしたが、博士後期課程に進むべきか迷っていた時、あるいは海外調査に行くことに後ろ向きになっていた時に、力強く背中を押してくれて、無条件にサポートしてくれたのが母だったからに他なりません。



これまでおよそ賞などというものとは無縁に生きてきた私ですが、論文賞という賞を頂いた意味というものを考えたときに、私個人で消化させていただく意味と、日本語教育という分野において目指すべき方向付けという 2 つの意味があるように思いました。個人的な話になりますが、私は、数年前に実務の世界から学術の世界に足を踏み入れました。先が見えない状況の中で途方に暮れ、迷うことも多々ある毎日を送っている中で、本論文賞の受賞によって、「研究を続けてもいいのかもしれない」という小さな肯定の種を頂けたように感じました。

本論文が賞を頂くのに値するのだろうか、と自問することが今でもあるのですが、思えばこの論文は、インタビューに快く協力して下さったベトナム人の方々により「書かせてもらった」とも言えるものであり、その点で彼らに少しは恩返しのできたのではないかとも思う次第です。本論文は、ベトナムのドイモイ改革前の日本語教育史を政策の受け手である日本語学習者の立場からの解釈を含めて構築し直したのですが、実はこの論文には続きがあり、それはベトナム人日本語話者の方々の経験と語りについて、より焦点を当てたものです。書き記されなければ残らないであろう、歴史の証言者たり得る日本語話者たちの声を残しておきたい、という思いで、現在も調査研究を行っています。私は以前ベトナムで、日本語教育支援を含む国際文化交流の仕事をしていました。当時は、親日派・知日派を増やすために海外の日本語学習者は増やさねばならぬのだ、という命題のもと仕事をしていました。しかし、一体どれだけの学生が学校卒業後も日本語を使う機会があるのだろうか、日本語を学び、使用する人たちにとって、あるいは海外の社会において、日本語教育は何か意味を持つことができるのだろうか、というような、自省に似た多くの疑問が、私の研究関心の出発点になっています。「授賞理由」で評価して頂いた項目が、私のこの立ち位置にも関係するように思われましたので、今後ともそれを失うことのないよう精励し、微力ながら知見を積み重ねられるよう研究・教育活動を続けていきたいと思っております。

査読コメントの修正過程において心身を消耗したことは採用通知で一気に吹き飛びましたが、査読委員の先生方も同様に時間を削り審査をして下さったからこそ、本論文は日の目を見ることができました。査読委員の先生方に対しては、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

2017年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

伊東祐郎（東京外国語大学・教授）

この度、2017年度「学会活動貢献賞」を受賞いたしました。2018年度春季大会にて栄えある表彰を受けました一同を代表いたしまして、一言謝辞を述べさせていただきます。

学会活動貢献賞は、日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし設けられました。学会の役員・代議員・旧評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られるもので、私が会長職に就いてから表彰制度を見直し新たに設けた賞です。まさか自分が受賞することになるとは夢にも想っておりませんでしたので、感謝の気持ちでいっぱいであります。



私が日本語教育学会に入会したのは、1983年頃で、米国の大学で日本語を教え始めた頃でした。教育者として研究者として学会員になっておくことは自分のキャリア形成の上で必要であろうとの判断からでした。帰国してからも、学会は日本語教育にかかわる情報入手と人との出会いの場としての泉のようなものでした。私にとって最初の学会活動は、当時、日本語能力試験の項目分析の調査研究を行っていた試験分析委員会でした。私はテストングや評価に興味を持っていましたから、この委員会でこの分野の第一線で活躍されている先生方と出会い、試験や統計にかかわる研究ができたことは大きな財産となりました。

2013年春、日本語教育学会はこれまでの社団法人から公益社団法人に組織体が変わりました。その直後に、私は学会長に就任することになりました。それまでは副会長としての経験はありましたが、学会長に選出された時はこれまでにない重圧感、そして身の引き締まる緊張感がしばらく続きました。4,000名から構成される大組織を率いることになった責任感、それと共に、新たな組織体を名実ともに充実させなければならない使命感が影響したと思っています。

本学会は1962年に「外国人のための日本語教育学会」という名称で発足して以来、半世紀以上が経過しました。私が学会長として務めた4年間は、これまでの先人の作り上げた組織を継承しつつ、新たな時代を切り拓いていく学会に生まれ変わるための準備期間でした。学会の存在理由、活動目的、それらの意義等を根本から検討する4年間となりました。この間に多くの学会員と膝を交えて語り合い、将来の学会像を造り上げてこられたことは、何ものにも代えがたい貴重な時間でした。常に心に願っていたことは、学会が誰にとっても自己実現の場を有している組織であることでした。

この栄誉はこれまで自分にいつも刺激をくださり、学会活動を支えてくださった学会員の皆様のお蔭であると実感しています。今後も多くの人たちとの絆を大切にして、教育・研究活動、そして学会の発展に尽力していきたいと思っております。

最後になりましたが、このような晴れがましい機会を与えていただいた学会関係者の皆様にお礼申し上げます。